RITSUMEIKAN

NEWS LETTER

Sep. 2008 04

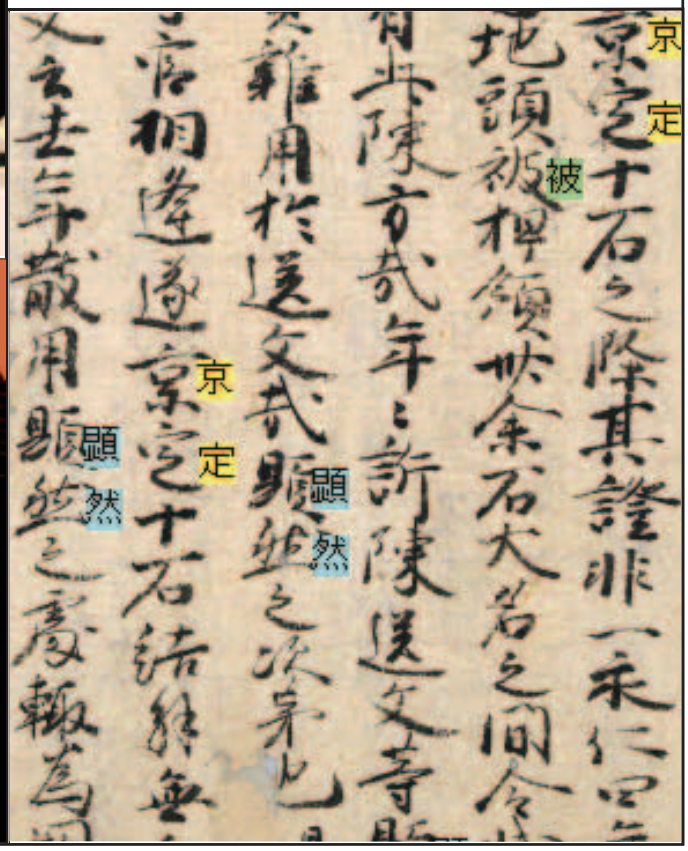
立命館大学グローバル COE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」ニュースレター

Contents

稲葉 光行
DH2008 参加報告 2

岡本 隆明
資料のなかの文字と絵 3

行事の記録 4



MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY [MEXT]
GLOBAL COE [CENTER OF EXCELLENCE] PROGRAM
DIGITAL HUMANITIES CENTER FOR JAPANESE ARTS AND CULTURES, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Staff Research

DH2008 参加報告

稲葉 光行（立命館大学政策科学研究科・教授 /「Web 活用技術研究班」）

本年 6 月 27 日から 29 日まで、フィンランドで開催された Digital Humanities 2008 (DH2008) に参加する機会を得ました。

今回の参加目的は、DH 研究の動向調査、人脈作り、および JDH 拠点の広報活動でした。まず学会受付で当拠点の資料配布を依頼したところ、受付横に専用ブースが設けられ、そこで私が直接広報活動をすることになりました。日本文化 DH という、多くの参加者にとっては多少特殊な話題にどれだけ興味を持たれるのか不安もありましたが、国も研究対象も全く異なる人でも、ブースの前でお互いの研究紹介をしている間に、DH という基盤の上で共通の話題が湧き上がってくるのが不思議でした。日本から参加された先生方に至っては、初対面にも関わらず、分野も大学の枠も超えて「一緒に日本の DH を盛り上げていきましょう」という、力強いメッセージを頂きました。そしてこれらの先生方のご支援のおかげで、学会のコアメンバーに直接本拠点の紹介をする機会が得られたことには深く感謝しております。

研究発表やパネルでも、多くの興味深い話題に触れることができました。ただ、限られた文字数で詳細を紹介することはできませんので、特に印象に残ったもの（の一部）を紹介します。

まず招待講演で、Prof. Hyvönen が紹介した、フィンランドの文化遺産に関する統合型 Web データベース CultureSampo に感銘を受けました。これは、同国の抒事詩カレワラに関わるコンテンツなどを、セマンティック Web やオントロジー技術を使って統合し、意味性にもとづいた情報探索環境を提供する仕組みです。その国固有の文化資産を素材として研究をすすめた結果、世界中の DH 研究者にとっても参考になる、高い完成度をもったシステムが構築された事例として興味深いものでした。

パネルセッションでは、デジタルアーカイブの持続可能性や TEI 標準について議論する場があり、どれも良い勉強になりました。中でも印象的だったのは、Defining an International Humanities Portal というパネルでした。ここでは、DH 研究機関同士の情報交換のための CenterNet の活動が紹介され、DH 研究における国際的な連携の可能性について意見交換が行われました。最後に議長の Prof. Fraistat が、DH 学会への参加者が欧米に偏っていること、またテキスト系の研究が多いことを指摘した上で、もっと多様な国・地域や研究領域の研究者に参加してもらい、それらの人々が、個別性を超えて、ヒューマニティーズの進歩という共通の目的のために協力できる方向に持っていくべきだ、という主旨の総括をされていました。

本学会全体を通じて、個別性を追求する活動が、デジタル技術を媒介とすることで、国や研究領域を超えた相互理解や共通の知の創造につながるという、DH 研究の本質的な意義について学んだ気がします。そして当拠点においても、日本文化 DH という個別性を追求しつつ、そこから DH 研究全体、あるいはヒューマニティーズ全体に対してどのような貢献ができるのかを探求することの重要性を、強く意識させられた学会でした。

（いなば　みつゆき　ソフトウェア工学）

会場入り口

JDH の専用ブース

会場遠景

Staff Research

資料のなかの文字と絵

岡本 隆明（本拠点・PD /「日本文化研究班」）

私は日本史を専門としており、古文書の筆跡に着目した研究を行ってきました。多くの文書のなかから同じ筆跡の文書を探し出すことによって、同じ人物が書いた文書を集め、なにが書かれているか、という文書の内容だけではなく、「なぜこの人がこの文書を書いたのか」、「なぜこの人が書いた文書がこの群に含まれているのか」というような視点からも文書を分析します。

筆跡の比較においては、基準とする文書と比較の対象となる文書とに共通する文字を探し、それら文字の全部を総当たり的に比較しなくてはなりません。これはかなり大変な作業であるため、コンピュータを使用して、どの資料のどこにどのような文字があるのかを整理し、これをもとに文字や文字列を検索・表示する方法を研究しています。

ある文字が資料の「どこに」あるのか、という情報には二種類あります。ひとつは、丁・行・桁などのテキストの論理的な構造における位置であり、もう一つは画像上の座標で表現される外形的な位置です。

一つひとつの文字データにこの二つの位置情報を与えることにより、文字を集めてテキストを再現するとともに、文書画像上における文字の位置を特定することが可能となります。

文字データと画像データとが座標を介して関連付けられていると、文書画像から文字部分を切り出して文字のカタログを作成したり、あるいは、図のように、文字や文字列を検索して、文書画像上の検索語がある部分にハイライト表示を行う、といったことを実現できます。

私が属する日本文化研究班では古文書などの文字資料よりも、浮世絵などの絵画資料が中心です。そこで、アートリサーチセンターに蓄積されているデジタル化された画像を対象として、「どの資料のどこになにがあるのか」を整理できるように応用をすすめています。

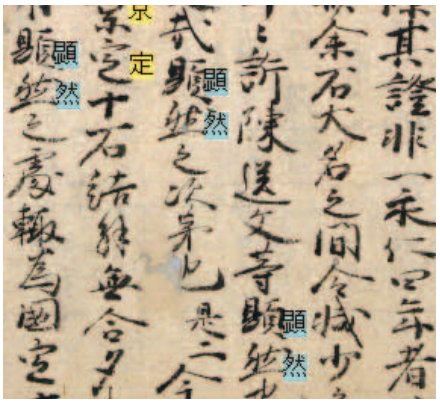
このシステムは、絵の上に付箋を貼ってメモをのこすような作業をコンピュータ上で行うものですが、紙の付箋ではなく、あえて、コンピュータを用いる利点は何でしょうか？

まず、個々の「どこになにがあるのか」というデータをもとにして他のコンテンツを生成することができる、ということです。たとえば、浮世絵のなかの版元印部分にマークをつけてそのデータを入力しておけば、データベース上で検索・表示が可能であるというだけではなく、版元印部分の画像を切り出し、入力されたデータとあわせてレイアウトを行って PDF 形式などで出力し、版元印一覧を作成する、といったことをプログラムにより実現できるわけです。

また、Web 上で利用する場合、「どの資料のどこになにがあるのか」というデータは URL で表現できるため、例えば、研究者がメールでアートリサーチセンター所蔵の或る絵の一部分について何かを別の研究者に伝えたい、というときには、画像の全体や一部をメールに添付したり、問題にしている部分がわかるような細かな説明をつけなくても、「どの資料のどこになにがあるのか」というデータを作成してその URL を伝えるだけでよく、URL を伝えられた人は、ブラウザからその URL にアクセスすると付箋がつけられた状態の絵を見たり、メモを読むことができる、といったことを実現できます。

人文学分野では、コンピュータは主にデータベースの用途に用いられてきました。目録に始まり、文字資料の場合には資料全文、そして画像も参照できるようになっています。しかし、目録と資料全文、目録と画像とはたいていの場合、関連付けられていますが、資料全文（あるいは絵画資料の場合には画中の様々な要素データ）と画像との関連付けは実はあまり進んでいません。「どの資料のどこになにがあるのか」を整理することにより、今後の人文学におけるコンピュータ利用の可能性を示すことができると考えており、日本文化研究班におけるこの試みはデジタル・ヒューマニティーズの進展に一つの役割を果たせるのではないかと思っています。

（おかもと　たかあき　日本史学）



立命館大学藤井永観文庫所蔵「東寺長者補任」紙背

行事の記録

イベント（主催・共催）の記録

■［シンポジウム、ワークショップ］「GIS Day in 関西 2008」2008 年 8 月 29 日（金）　立命館大学・衣笠キャンパス
※立命館大学歴史都市防災研究センター、立命館大学文学部地理学教室と共同で主催。

GCOE セミナーの記録

会場：【衣笠】立命館大学アート・リサーチセンター　【BKC】立命館大学情報理工学部メディア情報学科会議室他
※所属未記載は本拠点研究メンバーです。

■第 25 回　7 月 1 日（火）
上村 雅之＋尾鼻 崇「遊戯としてのビデオゲームの研究」
■第 26 回　7 月 8 日（火）
近藤 暁夫「資本主義経済導入期の京都における地代と土地利用　ーGIS を用いた土地利用 1 筆水準でのチューネンモデルの再検討ー」
戸所 泰子「京都の祇園祭をめぐる新町通の景観復原」
■第 27 回　7 月 15 日（火）
本多 健一「民俗行事・芸能の歴史地理学的研究　ー近世京都の六斎念仏を事例にー」
桐村 喬「地図情報のカタログサイトの開発　ー実装機能の検討ー」
■第 28 回　7 月 22 日（火）
塚本 章宏「大正期京都における「遊客」の属性とその空間的特性　ー『遊客人名帳』を用いた宮川町の事例分析ー」
石上 阿希「ホノルル美術館レインコレクションの調査及び公開」
■番外編　ランチタイム・セミナー　7 月 24 日（木）
Prof. Ruslan Rainis　(Universiti Sains Malaysia, Malaysia)
" The Development of GIS Applications for Social Sciences and Humanities in Malaysia: Current Status, Issues and Prospects "
■第 29 回　7 月 29 日（火）
Dr Lucia Dolce　(University of London SOAS, UK)　" How do we study Japanese religion? "
高橋 幸恵「能の稽古における第二次口頭性手段の有効性と課題」
吉田 真澄「平安貴族の移動からみた平安京」
中尾 芙貴子「GIS を用いた古代史研究の試み」

イベント、GCOE セミナーの最新情報は下記のサイトをご覧ください。
立命館大学・日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点 HP　http://www.ritsumei.jp/humanities/index j.html
http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/GCOE/
立命館大学アート・リサーチセンター HP　http://www.arc.ritsumei.ac.jp/
GCOE セミナー・告知ブログ　http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/GCOE/seminar/

文部科学省グローバル COE プログラム
「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」(立命館大学)
News Letter 第 4 号
2008 年 9 月 30 日発行

立命館大学アート・リサーチセンター
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
TEL:075-466-3411
FAX:075-466-3415
http://www.arc.ritsumei.ac.jp/

お問い合わせ
立命館大学研究部人文社会リサーチオフィス アート・リサーチセンター事務局
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
TEL:075-465-8476（月～金 9:00 ～ 17:30）
FAX:075-465-8342
E-mail:jdh-jimu@st.ritsumei.ac.jp